

一風の中の草——オニ次世界大戦中の簡単な集約

(1)

私どものごころついた頃、日本の趨勢は徐々に軍国調に染められゆき、女学校家庭科をある頃は、まさに大東亜戦争に突入してしまつた時様でありました。学校内での勤務奉仕の作業も傷痍軍人の病衣を縫う仕事、そして先ず最初に削られた授業は、英語、音楽などの課目でした。ラジオは毎日、「大本営発表」というアナウンスの聲とともに日本軍の戦果を報道するのみ、それにつづいて海行なばりの曲が奏され、戦死者の発表がなされ、いまだ、時に思ひ出さるほど心に深く刻まれた、痛み、の連続でした。

我々庶民の生活は何の情け容赦もなく物、心ともに次第に追いつめられ、ゆき、日常の食料の不足、衣料なども統制経済の範に入り男性の国民服と稱するもの、女性の「もんぺ姿」なども、それも多くは家にある手持の布地を流用した仕立直しのもので大半でした。そして次第に本土への空襲もはげしくなりました。

一般の人々は報道管制の下におかれ、戦況の悪化も知らばろげには察知していても、国際情勢の真相も推移もよくわからなりました。ラジオ、新聞などの

報道のみを信じ、来るべき勝利の日々を確信し日夜いたむきに生きていたように思えます。然し、その水面下、良識ある烟眼の人々の奔走もあり、昭和二十年八月十五日、先の大皇、昭和天皇の御英断により召勅が發せられ、日本の北から南の端に至るまで、そしてアジア各地、シベリア、南方の島々からの帰還者があふれ、混乱混乱の時期を迎え、然しそれらの人々がそれらの場所をベストと盡し現在まで懸命に生きぬいてきました。

今日、このゆたかな日本があるのは、あらゆる面の如何に多くの犠牲の上にあり如何に多くの涙と祈りとそして知恵の上に築かれたものか、私たちはいつも忘れずにはならないと思ひます。

その多時の日本の歴史のなかを歩いてきた一人の人間として、またともに生きてきた世代の、きびしく、つらい思いをもう一度述べてみることで、亡くなる小の方々の平安を願ひ、これからの人生を勇気をあきらめてよりよく生きていきたいと願ひ、半世紀も前の戦時下、及び戦後を通じて、青春を送ったひとりの娘の記録をつづるためのプロローグとしたいと思ひます。

森居 慶子